

鳥居 鎮夫先生を偲ぶ

筑波大学名誉教授
浅野 勝己

鳥居 鎮夫先生（東邦大学名誉教授）は、2012年4月29日に心疾患により逝去された。当年の6月に88歳の米寿を迎えられる僅か2ヶ月前のことであった。

鳥居先生は、1924年6月19日に静岡県に生まれ、1948年9月に名古屋大学医学部をご卒業後、同年10月に第一内科（勝沼内科）の副手となり、12月に医師国家試験に合格された。

文化勲章受賞の内科学・血液学の権威で名古屋大学総長であった勝沼精蔵教授の門下生で、1957年に“X線技術者の血液像”（英文）の研究で学位を取得されている。この勝沼内科の同門で先輩の朝比奈一男先生が東邦大学医学部教授に赴任されていたのが縁で、後輩として1955年4月に30歳の若さで助教授として東邦大学に招聘されたのである。

恩師の勝沼精蔵先生に“東京へ行き勉強しないか”と云われ、後先のことを何も考えずに東邦大学にやって来たときを述懐されている。

当時の大学のキャンパスは戦災で焼け、生理学教室には研究器具は殆どない状況であった。朝比奈教授も実験が出来なく“病態生理学(上下2巻)”（医歯薬出版）を執筆されていた。救いは学生と共に増幅器を用いてのウサギの脳波測定が出来たことであった。また脳波研究の為に東大の時実利彦教授の脳研に研修に赴いたのである。

“海馬脳波の覚醒パターンと低振幅速波パターン”（日本生理誌 22, 1960）を発表して以来、大脳辺縁系の脳波研究を発展された。また脳と脊髄を切り離れたネコで脳波と共に血圧、瞳孔などを記録し、脳波と自律神経系の関連分野に意欲的に取り組まれたのである。



1963年9月にフルブライト研究員として米国ミネソタ大学、次いで1964年9月には米国ケンタッキー大学に留学され、脳生理学の研鑽に努められた。この米国での2年間の留学後、早速に教室に脳波実験室を新築され、さらなる脳波研究を発展された。

特に1968年にはカリフォルニア大学ロスアンゼルス校（UCLA）のクレメンテ教授らのグループと日米科学協力プログラムを組み、2人の米国研究者が東邦大学に3ヶ月滞在され脳波研究の国際交流が進展された。

さらに当時、東邦大学生化学教室の柳沢 勇教授の発見された有機ブロム化合物の逆説睡眠誘発作用に関する研究プロジェクトが、ライオン研究所の協力により展開され、小生も検者および被検者の一人として睡眠研究に参加させて頂いた。

ライオン（株）はこの研究成果をエビデンスとして、新しい睡眠薬の開発へ発展されたのである。

“髄液内有機ブロム化合物の逆説睡眠誘発作用”（日本生理誌 33, 1971）。

その後、香りの心理効果に関する委託研究が進められ、脳波トポグラフィによる香りの興奮・鎮静水準に及ぼす影響についてのアロマテラピー科学の発展に貢献されたのである。

先生の35年間のご在職時とご退職後を通しての自著論文は、和文139編、欧文74編および著書・訳書は23冊に及んでいる。

著書の第1号は、“行動としての睡眠”（1984、青土社）であり、次いで“夢を見る脳—脳生理学からのアプローチ”（1987、中公新書）が端緒であり、次いで眠りに関する一般向け啓蒙書を1990年代に約10冊刊行されている。さらに2000年代に入り“アロマテラピーの科学”（2002、朝倉書店）など香りに関する研究成果がまとめられ、最後の著書として“究極の眠り学—頭とカラダがスッキリー”（2007、PHP研究所）が出版されている。

このように先生は一貫して“意識”の問題をライフワークとして研究され、その成果を論文および著書にまとめて来られたのである。

つぎに当第一生理学教室の助手および講師を朝比奈教授のもとで務めさせて頂き、1972年に提出した低酸素生理学に関する小生の学位論文について副査として指導戴いた。そのさい心深い励ましのお言葉を頂き感謝の至りであった。その後、“急性低圧低酸素環境下での睡眠時の脳波および心行動態”（英文）（Sleep Res. 18, 1989）を故奥平進之助教授と先生との連名で投稿出来たことは誠に感激に堪えない。

つぎに当第一生理学教室の同窓会は、1960年頃に医局に設けられ、“生理を愛する”の意味から、文字どうり“愛生会”と命名し、毎年1回の例会を開催して来たのである。すなわち先生のご退職後の1991年より2011年までまさに20年間にわたり、毎年10月ごろに継続して開催して来た。

この愛生会の歴史の中でのハイライトは、2006年4月の瑞宝小綬賞ご受賞の祝賀の集いであっ

た。当日81歳であられた先生は、極めてお元気で“今後は100歳を目指して頑張りたい！”と意気込みを語られていたのである。

先生のお言葉で印象深いことは、第一生理での3年生の生理学実習の最終発表の折に、黒板に大きな字でドイツ語の3文字“LESEN, DENKEN, ARBEITEN”を板書され、これは恩師の勝沼精蔵先生から教えて頂いた言葉であり、研究にさいしての心構えであるご教示頂いたことである。

先ず今日までの先行研究成果の文献を読破し、何が本質の課題なのかを思考し、そして仮説の検証のため実験に入るというこの3つのキーワードを今も学生に紹介している。結びに先生のご冥福を衷心よりお祈りする次第である。

略歴

1924年 6月 19日	静岡県に出生
1948年 9月	名古屋大学医学部卒業
10月	名古屋大学医学部第一内科副手
12月	医師国家試験合格
1955年 4月	東邦大学医学部助教授
1963年 9月	フルブライト研究員として米国ミネソタ大学留学
1964年 9月	米国ケンタッキー大学留学
1971年 8月	東邦大学医学部教授
1979年 7月	第3回国際睡眠学会会場展示委員長
1986年 8月	第2回日本催眠学会会長
1989年 6月	第14回日本睡眠学会会長
1990年 3月	東邦大学医学部定年退職
1991年 4月	東邦大学名誉教授
2006年 4月	瑞宝小綬賞受賞
2012年 4月 29日	逝去

学会役員
日本生理学会評議員
日本睡眠学会幹事
日本催眠学会理事
日本脳波筋電図学会評議員